

大いに発展されることを望むものである。

筆者も兵庫県産甲虫相完成を目指して1938年から調査を始め現在572編の報文を発表した（1993年末で昆虫以外の報文も含む）。また“兵庫県産甲虫類に関する文献目録”を自刊したりしている（1975, 1981, 1984, 1994）（1992年までに集めた県産甲虫, 異翅目標本は1993年2月県立人と自然の博物館へ寄贈した）。

兵庫県の甲虫相もほぼその概要がわかってきた段階である（尤も部分的には手つかずのグループがあったり, 県下での未調査地域もあるが-), これをどのような形式で, どのような方法で出版するか目下見当もつかない。昆虫全般ということになると恐らく組織的な調査が出来ない限り無理のようである。

自然破壊による環境変化は著しく次々と変わる昆虫相・甲虫相をどの時点でどのような形式でおさえるのか大きな問題になると考えられる。

(1994年3月)

六甲山系を中心とした神戸並びにその近傍の甲虫相*

高橋 寿郎

はじめに：

東播磨の甲虫相・西播磨の甲虫相につづいてここに六甲山系を中心とした神戸並びにその近傍の甲虫相をまとめて見ることにした。

そもそも兵庫県の甲虫相のまとめはまだまだ前途遼遠で組織的な調査が全く出来ていないので手つかずのグループが多くありこれからの問題として残るものである。ただ一般的には川辺郡猪名川町, 川西市, 能勢を仲田元亮氏による“能勢の昆虫（甲虫）”（1970, 1978, 1982）としてまとめられ宝塚市のまとめも東 正雄氏等により公表されており（1992, 1993）, 氷上郡は山本義丸氏によるまとめがあり（1958, 1962）, 但馬地方は高橋 匡氏がとりまとめた出石地方（1963, 1965）, 豊岡を中心として氷の山, 扇の山等の山岳地帯の調査（1975, 1975, 1976, 1978 etc）, そして現在も但馬むしの会を中心とした調査が続けられている。淡路島の甲虫相も不十分ではあるが最近発表させて頂いた（1994）, これ等の地域を除いたものまとめが始めに記した“東播磨の甲虫相, 西播磨の甲虫相”（1993, 1994）

*兵庫県甲虫相資料・296

と出来ここに六甲山系を中心とした西摂津地域の甲虫相をまとめることが出来た。兵庫県の甲虫相のまとめにあたっての第一段階のまとめがなんとか格好がよかったのではないかと考えている。

何分にも甲虫の種類は多いし、微少なもの、特異の生活環境のものがいたりでその全部を調べることは僅かの人員では全く駄目でさらには同定が充分に出来る現状ではないので大変不十分なまとめにならざるを得ない結果となった。いわゆるこの地域甲虫相の外観でも知って頂ければ望外の喜びである。

同定については出来るだけ正確を期したつもりであるが浅学未熟による間違いが多々あるかと危惧している。御教示御指適を頂くことが出来れば幸いである。またこの地域に関する多くの文献からの引用については出来るだけとり入れたがそれら出典文献類の処置については“東播磨の甲虫相”始めのべたような処置にさせて頂く。

また一部標本についてそれぞれ専門の先生方に見て頂いたものも結構ある。一々芳名は記さないが厚く御礼を申しあげさせて頂く。

尚調査に当たっての採集品總て（但し1992年に採集のものまで）“県立人と自然の博物館”に保管されている。また本報文は1993年末現在の状況においてとりまとめたものである。

1. 調査範囲

六甲山系を中心にまとめたもので神戸市ばかりでなく芦屋市、西宮市、宝塚市（一部）、即ち東は武庫川までを意味し、北と西は神戸に所属する所のみまでとした。

2. 調査地点

六甲山系を中心とした地域の調査は戦前から出来る限り出かけ（大体戦前は日曜日毎に何処かの地点に行くとか、或る時期は烏原貯水池畔は毎日出かけるとか）一々その調査地点での調査日数をまとめて記すのは多すぎるので省略するとして調査地点、地域名のみ次にかかげておく。

宝塚市. 岩倉山.

西宮市. 仁川, 甲山, 神呪寺, 甲子園浜, 香櫛園浜.

芦屋市. ごろごろ缶.

神戸市. 六甲山上, 山上～紅葉谷～有馬, 六甲登山口～逢山峽～六甲山頂, 六甲山夜間採集, 保久良山～金鳥山～六甲山, 一王山, 摩耶山, 摩耶山～天狗道～市ヶ原～布引, 布引～市ヶ原～摩耶山上, 摩耶山上, 摩耶山夜間採集, 再度山, 諏訪山公園～大師道～再度山～修法ヶ原～布引～再度山東谷～二本松～平野, 教育植物園, 森林植物園, ポートアイランド, 神戸大橋, 烏原貯水畔～菊水山, 鈴蘭台, 北鈴蘭台大山

公園, 藍那, 山の街, 箕谷, 押部谷町木見, 榮~シブレ山, 木津, 藍那~木幡, 藍那~木津, 藍那~源平ハイキングコース~鴨越, 稚子ヶ墓山~帝釈山, 丹生山, 谷上, 芦谷溪谷, 八多町屏風, 有馬落葉山, 有馬口~逢山峽, 下谷上, 妙法寺, 太山寺, 木幡~太山寺, 多井畑, 須磨浦~鉢伏山 (以上東播磨の甲虫相, 西播磨の甲虫相にのべた調査回数の倍以上の調査回数となっている).

3. 六甲山系を中心とした神戸並びに近傍の甲虫の種類数

今回の調査でまとめたこの地域に産すると思われる甲虫類の種類数は90科1,884種であった. これらの種の目録は作製してあるがあまりにも長文となるので此処には省略するとして科別種類数のみ次にまとめておく (括弧内の数字は兵庫県下から知られている種数である).

COLEOPTERA 甲 虫 目

Family	Cupedoidea	ナガヒラタムシ科	1種 (2)
Family	Paussidae	ヒゲトオサムシ科	1種 (1)
Family	Omophronidae	カワラゴミムシ科	1種 (1)
Family	Cicindelidae	ハンミョウ科	6種 (10)
Family	Carabidae	オサムシ科	184種 (300)
Family	Halplidae	コガシラミズムシ科	5種 (5)
Family	Noteridae	コツブゲンゴロウ科	2種 (3)
Family	Dytiscidae	ゲンゴロウ科	31種 (40)
Family	Gyrinidae	ミズスマシ科	4種 (7)
Family	Hydrophilidae	ガムシ科	23種 (37)
Family	Histeridae	エンマムシ科	26種 (44)
Family	Ptiliidae	ムクゲキノコムシ科	1種 (2)
Family	Leiododae	タマキノコムシ科	10種 (17)
Family	Catopidae	チビシデムシ科	3種 (16)
Family	Silphidae	シデムシ科	13種 (17)
Family	Staphylinidae	ハネカクシ科	190種 (290)
Family	Pselaphidae	アリヅカムシ科	14種 (27)
Family	Scydmaenidae	コケムシ科	1種 (3)
Family	Scaohidiidae	デオキノコムシ科	16種 (28)
Family	Clambidae	タマキノコムシモドキ科	1種 (1)

Family	Helodidae	マルハナノミ科	5種 (9)
Family	Lucanidae	クワガタムシ科	8種 (17)
Family	Trogidae	コブスジコガネ科	3種 (4)
Family	Geotrupidae	センチコガネ科	3種 (3)
Family	Scarabaeidae	コガネムシ科	99種 (152)
Family	Byrrhidae	マルトゲムシ科	2種 (2)
Family	Ptilodactylidae	ナガハナノミ科	3種 (7)
Family	Psephenidae	ヒラタドロムシ科	5種 (7)
Family	Elmidae	ヒメドロムシ科	1種 (13)
Family	Dryopidae	ドロムシ科	1種 (1)
Family	Limnichidae	チビドロムシ科	1種 (2)
Family	Heteroceridae	ナガドロムシ科	1種 (1)
Family	Buprestidae	タマムシ科	45種 (81)
Family	Elateridae	コメツキムシ科	63種 (135)
Family	Trixagidae	ヒゲブトコメツキ科	2種 (3)
Family	Lampyridae	ホタル科	8種 (10)
Family	Ometheidae	ホタルモドキ科	1種 (2)
Family	Cantharidae	ジョウカイボン科	31種 (42)
Family	Lycidae	ベニボタル科	20種 (37)
Family	Dermetidae	カツオブシムシ科	13種 (16)
Family	Anobiidae	シバンムシ科	10種 (18)
Family	Ptinidae	ヒョウホンムシ科	3種 (4)
Family	Bostrychidae	ナガシクイムシ科	7種 (10)
Family	Trogostidae	コクヌスト科	2種 (5)
Family	Cleridae	カッコウムシ科	8種 (18)
Family	Melyridae	ジョウカイモドキ科	10種 (13)
Family	Nitidulidae	ケシキスイ科	54種 (89)
Family	Phalacridae	ヒメハナムシ科	9種 (13)
Family	Phaenocephalidae	ミジンムシモドキ科	1種 (1)
Family	Sphingidae	ヒメキノコムシ科	1種 (3)
Family	Cucujidae	ヒラタムシ科	6種 (14)

Family	Silvanidae	ホソヒラタムシ科	6種 (11)
Family	Cryptophagidae	キスイムシ科	12種 (16)
Family	Helotidae	オオキスイムシ科	1種 (2)
Family	Byturidae	キスイモドキ科	4種 (4)
Family	Biphyllidae	ムクゲキスイムシ科	4種 (8)
Family	Languriidae	コメツキモドキ科	8種 (9)
Family	Erotytidae	オオキノコムシ科	15種 (31)
Family	Cerylonidae	カクホソカタムシ科	4種 (5)
Family	Corylophidae	ミジンムシ科	5種 (7)
Family	Endomychidae	テントウダマシ科	11種 (17)
Family	Coccinellidae	テントウムシ科	58種 (73)
Family	Discolomidae	ミジンムシダマシ科	2種 (2)
Family	Lathridiidae	ヒメマキムシ科	7種 (13)
Family	Colydiidae	ホソカタムシ科	3種 (9)
Family	Mycetophagida	コキノコムシ科	6種 (15)
Family	Cisidae	ツツキノコムシ科	8種 (13)
Family	Tenebrionidae	ゴミムシダマシ科	63種 (95)
Family	Lagriidae	ハムシダマシ科	6種 (8)
Family	Alleculidae	クチキムシ科	12種 (17)
Family	Tetratomidae	キノコムシダマシ科	1種 (4)
Family	Elacatidae	クチキムシダマシ科	1種 (2)
Family	Sapingidae	チビキカワムシ科	2種 (6)
Family	Pyrochroidae	アカハネムシ科	1種 (11)
Family	Melandryidae	ナガクチキムシ科	13種 (47)
Family	Scrautiidae	ハナノミダマシ科	9種 (10)
Family	Mordellidae	ハナノミ科	27種 (52)
Family	Rhipiphoridae	オオハナノミ科	1種 (4)
Family	Meloidae	ツチハンミョウ科	5種 (6)
Family	Oedemeridae	カミキリモドキ科	11種 (22)
Family	Anthicidae	アリモドキ科	21種 (28)
Family	Aderidae	ニセクビボソムシ科	6種 (6)

Family	Cerambycidae	カミキリムシ科	140種 (291)
Family	Chrysomelidae	ハムシ科	193種 (296)
Family	Anthribidae	ヒゲナガゾウムシ科	22種 (43)
Family	Attelabidae	オトシブミ科*	42種 (55)
Family	Apionidae	ホソクチゾウムシ科	11種 (19)
Family	Curculionidae	ゾウムシ科	156種 (267)
Family	Rhynchophoridae	オサゾウムシ科	7種 (15)
Family	Scolytidae	キクイムシ科	21種 (47)

以上はじめにのべたように六甲山系を中心とした神戸ならびに近傍の甲虫類は90科1,884種でそれに対応する兵庫県産の甲虫類は90科3,169種となる。

1993年末における筆者のまとめた兵庫県産の甲虫類は114科3,220種である(科数並びに種類数が異なるのはこの地域から見つかっていない科ならびに種類が兵庫県には産するからである)。したがって大雑把にみて兵庫県産甲虫類の58%位がこの地域に生息していることになる(勿論この数字はかなり流動的である)。

尚兵庫県産としてこの地域にのみ産することが知られている種が297種ふくまれている。

4. 兵庫・神戸を原産地とする甲虫類

今回こゝに報告する地域での甲虫相についての大きな特色の一つとして日本の甲虫の研究が始まったと同時にこの兵庫の地(現在の神戸市)の甲虫の研究が始まっており神戸・兵庫は日本の甲虫研究の嚆矢の地の一つであると云うことになる。したがって兵庫・神戸を原産地としている甲虫種が多くある。

そこで一応この兵庫・神戸を原産地としている甲虫類がいくらあるか科別に見てみる。始めに欧米人によって新種記載されたもので大体大正10年(1921)頃までのもの(数字を丸で囲んであるのは原記載以後神戸から記録の見られない種数である。学名はいっさい省略してある)。

ヒゲトオサムシ科, 1種, オサムシ科, 54種⑧, コツブゲンゴロウ科1種, ゲンゴロウ科7種, ミズスマシ科1種, ガムシ科5種, エンマムシ科3種, デオキノコムシ科3種, ハネカクシ科79種⑨, アリヅカムシ科5種⑩, クワガタムシ科1種, コガネムシ科21種②, ヒメドロムシ科1種, タマムシ科2種, コメツキムシ科8種, ホソホタルモドキ科1種, ジョウカイボン科4種①, ベニボタル科3種①, カッコウムシ科, ケシキスイ科1種, オオキスイムシ科1種, コメツキモドキ科3種②, オオキノコムシ科4種, ヒメハナムシ科2種①, テントウムシ科2種, テントウダマシ科4種, ミジンムシダマシ科2種, ゴミムシ
*最近沢田佳久博士によりチョッキリゾウムシ亜科を独立の科として取り扱われている(1992)。

ダマシ科17種③, ハムシダマシ科1種, クチキムシ科8種④, アカハネムシ科1種, ナガクチキムシ科2種, カミキリモドキ科1種, ツチハンミョウ科2種, アリモドキ科12種④, カミキリムシ科25種, ハムシ科24種①, ヒゲナガゾウムシ科3種, オトシブミ科8種, ゾウムシ科15種⑤, オサゾウムシ科1種, キクイムシ科3種,

以上42科343種

ついで主として昭和(1926)以後日本の学者・研究者によって神戸産を基産地として新しく記載命名された種は次のようである。オサムシ科4種, ハネカクシ科3種, ナガハナノミ科1種, タمامシ科1種, ツツキノコムシ科1種, ナガクチキムシ科1種, ハナノミ科2種, カミキリモドキ科1種, カミキリムシ科1種, ハムシ科4種, ゾウムシ科2種, オサゾウムシ科1種, 計12科21種である。

5. 六甲山系の注目すべき甲虫類について

まえにのべたように六甲山系を中心とする神戸市並びに近傍の地域に生息が確認出来た甲虫類は90科1,884種ありその内で兵庫県産として知られている甲虫類の中でこの地域からのみ記録ある297種を中心にいくらかの種について説明しておく(種数が多いので出来るだけ限定して簡単に説明するようにした)。

・ *Carabus maiyasanus* Bates, 1873 マヤサンオサム(オサムシ科)

種名にあるように摩耶山が原産地である。Batesによると摩耶山の天上寺(Moon-temple 標高2,000フィート)においてのみ見出されるとある。筆者の知見では摩耶山ではいがいと見つけにくく西隣の再度山には多く産する。大体この種は兵庫県下には広く分布している種であり神戸市内でも多く産地がある。

・ *Craspedonotus tibialis* Schaum, 1863 オサムシモドキ(オサムシ科)

戦前神戸市垂水区舞子(現在の星陵台)あたりではわりと見ることが出来ていたが現在住宅地になってしまっているので見ることは無理かと思う。おなじくオオヒョウタンゴムシ *Scarites sulcatus* Olivier も西宮市武庫川, 戸崎町, 甲子園, 武庫之荘の記録があるが最近採集されたということを開かない。

ゲンゴロウ科では最近開発により湖沼池, 河川等々の荒廃, 消滅で非常に変化したというか姿を消しつつあるものが多くあるようである。

エンマムシ科では県下でこの地域にしか記録のないものが6種ある。エンマムシ科の採集がかなり難しくなってきたのでこれ等のものが現在元気であるのかどうか大変気になるところである。

- *Dorcus hopei* (E. Saunders,1854) オオクワガタ (クワガタムシ科)

戦前でもかなり少なかった。戦後この地域での記録はあることはあるが実際問題として本種の産出はいささか無理のように思われる。

- *Copris acutidens* Motschulshy,1860 ゴホンダイコクコガネ
- *Copris ochus* (Motschulshy,1860) ダイコクコガネ (コガネムシ科)

ともに戦前の神戸にはいた。糞虫全般にいえることであるが農耕の機械化による牛馬飼育の減少、都市部における牛馬車の消滅と道路の舗装等々により糞虫類の生活の場が次第になくなってきたことから糞虫を見つけることが大変困難になり特に中、大型の糞虫はその生息地が非常に限定されたように思われる。上記の2種も兵庫県下でさえ限定された産地が知られているにすぎずましてこの地域内で見つけることは出来なくなっていると考えられる。

- *Onthophagus japonicus* Harold,1874 ヤマトエンマコガネ (コガネムシ科)

摩耶山麓に多産したと云う夢のような記録が残っている [Waterhouse,1875] この地域では絶滅した種と考えられる (日本全般からしてこの種の分布は非常に限定されているようである)。

- *Liatongus phanaeoides* (Wstwood,1840) ツノコガネ (コガネムシ科)

御影の記録はあるがこの記録は同定間違いなのかもしれない。戦前或いはいたのかもしれないがやはり現在絶滅種と見なくてはいけないであろう (現在但馬地方には生息していると考えられる)。

- *Anomala schoenfeldti* Ohaus,1915 チビサクラコガネ (コガネムシ科)

兵庫県下では西宮市と神戸市からのみ記録されている。西宮市では樋ノ口町で夏の夜かなり多く電灯に飛来すると、また阪神電鉄の東鳴尾駅、武庫川駅、甲子園駅の電灯にもかなり飛来するとのこと、西宮市内の団地などの敷地の草むらや芝生に発生しているようである。県下の他の地域での発生調査の要がある。

- *Glycyphana tonkinensis viridis* Sawada,1942 ホソコハナムグリ (コガネムシ科)

神戸市内の太山寺での記録が県下唯一のものである。広島県あたり海岸線ぞいにわりと産するようなので兵庫県下の海岸線ぞいに分布していて不思議はないと考えられる。

- *Osmoderma opicum* Lewis,1887 オオチャイロハナムグリ (コガネムシ科)

兵庫県下では宍粟群の坂の谷、養父群氷の山、美方群扇の山の山地帯にはわりと見られる種であるがこの六甲山系では戦前摩耶山にいたとか間違いであると騒がれたが戦後住吉、岡本で採集されている。摩耶山の杉のある地点には数少ないにしてもいるように思われる。

- *Nipponomarolia kobensis* Miyatake,1982 ハネナシナガクチキムシ (ナガクチキムシ科)

神戸市須磨白川台にて環境調査をやっていた際松の樹皮下から得た1♂6♀標本を久松定成博士に御送りしてこの類の専門家である宮武睦夫博士により新種記載をして頂いた (1982) 採集地は開発で変

わっておりこの種のように後翅を欠く種は絶滅してしまっているのではないかと考えられる。

- *Mesosa perplexa* Pascoe, 1858 チャゴマフカミキリ (カミキリムシ科)

中国、台湾では普通であるが日本では芦屋市と島原半島とに限られて知られている種であり林 匡夫博士によると恐らく明治以後に輸入材について輸入、定着したものとと思われるとある。戦前から芦屋市の特定の場所の特定の樹から採集されていた。現在でも採集されているらしいが樹が人家の庭にあるのでそこへ入って採集と云うことがむずかしいようなことを聞いた。

- *Mesechthistatus furciferus* (Bates, 1884) マヤサンコブヤハズカミキリ

- *Parechthistatus gibeer* (Bates, 1873) セダカコブヤハズカミキリ (カミキリムシ科)

共に摩耶山が原産地のカミキリムシであるがマヤサンコブヤハズカミキリは現在摩耶山並びにその付近では得られていないようで県下では中央部から北に分布しているようである。セダカコブヤハズカミキリは神戸市内にもいるし県下での分布も広いようである。

- *Olenecamptus cretaceus* Bates, 1873 オオシロカミキリ

- *Olenecamptus formosanus* Pic, 1914 タカサゴシロカミキリ (カミキリムシ科)

共に白いカミキリムシとしてよく知られている。オオシロカミキリは神戸市内でも見ることが出来るがクワ、ムクノキ類に集まり神社・仏閣の森の周辺で夜間灯火にやってくることもある。それ程個体数が多くないのかわりとお眼にかかり難い。タカサゴシロカミキリは本州に産することが報告されたのは戦前で須磨一の谷産のものであった。関 公一氏は亜種として命名されたが(1941)現在その取扱いはされていない。こちらの方も一般にはそれ程眼にすることは出来ないが材採集(ノグルミなど)による時は多数得ることが出来る。

- *Micolamia tuberculata* Pic, 1918 シロチビコブカミキリ (カミキリムシ科)

六甲山上のタンナサワフタギから10exsを採集した(林 匡夫博士同定)。現在兵庫県下での記録はこれ以外知られていない小さなカミキリムシであるから注意が足りないのではと考える。

- *Oides bowringii* (Baly, 1863) キベリハムシ (ハムシ科)

いまさら説明の要はないように思われる。明治の初め頃兵庫港を経て鳥原村あたりに定着したものが次第に県下でも分布を拡げているようであり場所により年度によりその個体数の増減の変化があるようである。多数の群棲状態に遭遇することもしばしばである。

どうも大陸産とは形態的に違っているように思われる。日本亜種となるのではと考えられる。

- *Hypera punctatus* (Fabricius, 1775) オオタコゾウムシ (ゾウムシ科)

最近神戸市内で見つかっている。県下では三田市でも採集されている。クローバを食害するゾウムシとしてヨーロッパ、北米あたりには普通にいるようである。神戸市内でも場所によってはわりと産するようである。日本での産は当地域が横浜に次いで2番目の記録になる(北関東にも分布しているようで

ある。1994)

- ・ *Dryophthorus japonicus* Konishi, 1963 スギクイサビゾウムシ (オサゾウムシ科)
筆者が布引で採集したものを中條道夫博士に同定を依頼, 同博士より小西正泰博士にわたり小西博士が新種記載されたものである (lex, 17 - V - 1959, T, Takahashi leg.)

6. 六甲山系の甲虫相概説

六甲山系並びに神戸市とその近傍の甲虫類は種類数にして90科1,884種が一応記録できている。この数字上からすれば兵庫県産甲虫類の58%位がこの地域に分布していることになる(神戸市域の面積は県土面積の約6.5%位にあたる)ただこの数字はかなり流動的で次々と調査が進むにつれて増減をくりかえしてゆくであろうと考えられるが傾向としてはほぼ同じようなものであろう。

まずこの地域の中心をなす神戸地方は日本の甲虫の研究が始まったと同時に始まったという大変重要な時期に研究・調査が開始されたことは意義のあることでありその結果神戸産(兵庫産)で記載をおこなわれ、学名を与えられたものが42科343種(大体1921年頃までに記載されたもの)もあるということは忘れてはいけない点であろうと考えられる。ただ之等が記載された当時の状況と現在の状況とはあまりにもちがいがすぎており当時産したとされたものが現在絶滅してしまったものが多くあるようである。特に砂浜の海岸線は現在では皆無状態でありそのような環境の下に生息していたものたちは絶滅したと考えざるを得ない。

六甲山系というのは須磨付近で海上から姿をあらわし東に徐々に高度を増して800m前後平坦な山頂部を形成しやがて宝塚、武庫川付近で高度を急に下げて地中に没するややいびつな矩形をした山地である。通常六甲山で親しまれているのはその東半部である。

六甲山形は全体的にはアカマツ林であるが自然植生も頂上付近の谷筋とか摩耶山、天上寺とか裏六甲、上唐櫃、下唐櫃などにもブナとかカシ林がある。再度山と有馬あたりにもシイ林が残っている。ただ市街地に近い所は市街地化されると同時にかつての昆虫の宝庫として知られていた山の街、箕谷は完全に市街地になってしまったし西神地域も最早街であって完全に自然状態が変わってしまっている。

戦前の神戸を知っているものはその変わりの大きさに驚いてしまうと同時にそこで生息していた甲虫達がこの世から姿を消してしまったものが数多くあることを残念に思はざるを得ない。

具体的にこの地域の甲虫相をながめてみると一番多く記録されているのがハムシ科とハネカクシ科のものである。その内ハネカクシ科の方はハネカクシを精力的に採集した人がいたと云うことによると考えられる。J.E.A.Lewis氏がその人でこの人による採集品によって専門家による多くの新種記載がある。ところがこれら新種記載された種がそれ以後全く記録として出てこない。当時の自然状態が良かった

たということ以外にこの仲間を採集、調べた人がいたということがこれだけの種が記録されたのであらう。以後こんどは全くこの類を採集する人、調査をする人があらはれないことから現在この地のハネカクシ相が全くわかっていないというのが現状だと思われる。たしかに当時の自然がよかったからであらう地上性のオサムシ科、食草性のハムシ、ゾウムシ、コガネムシ等が多く記録されている（コガネムシ等は牛馬が普通にいたことが影響あると思われる）。カミキリムシ類も結構いる。森林地帯がないにもかかわらず種類数がそこそこ見られる。古い時代の自然状態の良さが影響していると思われるが一方外来種のようなものがやってくる条件がいいということもあるようである。

キベリハムシとかオオタコゾウムシのようにこの地にやって来て定着する虫が結構あるのではないかと思う。イネミズゾウムシも多く見られるがこの種も外来種である。全般的にはやはり森林性のものはそれ豊富ではない。ハナカミキリとかナガクチキなどはすくないように思われる。それと海浜性のもの之は環境変化によるものであるが次第にその姿を見せなくなっている。したがってこの六甲山系を中心とした甲虫相を眺める場合戦前のは記録として認められても現在では生息していないものが数多くあることを知らなければいけない。現在の状況から見た場合部分的に残っている良い自然状態の所で細々と生息している甲虫たちが元気でいてくれることを望むだけである。

1993年あることで必要があり筆者がフィールドとしている神戸市兵庫区烏原貯水池をめぐる一帯の甲虫相をまとめて見た所なんと70科892種もの生息が確認出来大変せまい範囲での生息数であるがなんとといっても55年からの採集調査という長期間のものであり特に戦前はより一層自然であったということも影響していると思われる。この六甲山系をめぐる地域の生息種数からして甲虫相は面白そうであるといってもあんがいと近い所であるから調査日数が多いとか一般に注意されていないグループの調査をこの地域ではわりとやっている（珍しいものが少ないから止むを得ず）結果であることを忘れてはならない。ごく限られた前記自然植生の残っているような所（丹生山系などはまだ今の所手がつけられていない）このような地域を保護することによって比較的恵まれた甲虫相を大事にしたいものだと考える。

さらに一般に注意が払われていない興味をもたれないグループの調査が出来るとすればまだ新しい種の発見も出てくるだらうし生息種類数は更に多くなるであらうと考えられる。